様　式　Ｃ－４１

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２４ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：奨励研究
研究期間：2020～2020
課題番号：２０Ｈ００７６３

研究課題名　　中学生による「英語狂言」の有効性

研究代表者
青柳　有季（AOYAGI, YUKI）

東京学芸大学・附属小金井中学校・教諭

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　480,000円

研究成果の概要：本研究では、中学生が「英語狂言」として日本で演じたことがないと思われる「呼声」という「狂言」を「英語狂言」として創作・上演することで、その可能性と有効性を追究することを目的とした。そこで、「5分編」と「15分編」の２種類の脚本を創作した。古語から英語への翻訳の際には、①簡潔な文体を目指し、②言葉の響きや抑揚・間・リズムは可能な限り原曲に合わせて言語を置き換え、③狂言独自の言葉等はそのまま使うことに留意した。そして「狂言」の「型」を踏襲し、３つの節の謡と舞を含む「呼声」を外国の方々を対象に上演した結果、人間賛歌の内容や登場人物の魅力を含んだ「狂言」の素晴らしさを理解していただくことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、日本では中学生が「英語狂言」として演じたことがないと思われる狂言「呼声」を選択し、それを「5分編」と「15分編」の「英語狂言」として生徒と創作し、外国の方々を対象に上演し、その有効性を追究した。「抜参り物」の狂言の一つである「呼声」は、３つの節（平家節・小歌節・踊り節）・足拍子・リズミカルな明るい舞が特徴で、『語り・所作』の「様式性」と『声』の「写実性」が、狂言特有の「型」として重要な要素となっている。今後、伝統芸能に興味のある日本の中学生(教員の方）にもこの２種類の脚本を参考に「英語狂言」の「呼声」を創作・上演し、外国の方々に「狂言」の魅力を伝えていただければと願っている。

研究分野：英語教育

キーワード：狂言　呼声　英語狂言　型　平家節　小歌節　踊り節　舞

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究の目的

日本人中学生の英語指導において「ドラマ的手法」が用いられることは多い。たとえば、文型や文法項目の導入、教科書の内容を深める活動、そして英語劇の脚本を用いた活動などである。このドラマ的な活動は、「聞くこと」「話すこと」が主体だと思われているが、「読むこと」「書くこと」などの活動も入るため、統合的な活動となることが多い。私も「総合的な学習の時間」で「英語劇」の授業を担当して 20 年以上経つが、2013 年度からは「英語狂言」に取り組んできた。新学習指導要領には、教材の留意事項として、「日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化、自然科学」などに関するものの中から、生徒の発達段階や興味・関心に即して適切な題材を効果的に取り上げるものとする」よう記述されている。その中で、私が室町時代から続く「狂言」を選択した理由は４つある。

第１に、「狂言」には普遍かつ肯定的な人間性が描かれていて、人間関係の豊かさを感じさせてくれるという本質がある。この「狂言」の笑いこそ、健康で大らかな「人間賛歌(Human Comedy)である。そこで、「狂言」の素晴らしさを「英語狂言」という形で積極的に世界に発信していきたいと思った。第２に、「狂言」は科白と所作を中心とした写実的かつ喜劇的な対話劇である。「狂言」には「型」があり、『しゃべり、語り、謡（うたい）・所作』には「様式性」が、『声』には「写実性」が求められる。そして、それらは代々「口伝」という形で稽古が行われる。それらの「型」を踏襲することにより、日本人が室町時代から大切にしてきた伝統や、その精神性を外国の方々に理解していただきたいと思った。第３に、「狂言」は少人数（2～3 人）で演じられることが多く、１つの番組の所要時間も 20 分前後が大半である。したがって、年に 12 回程の授業には、人数、所要時間、そして「ゴール(年に数回の舞台)」の面で「英語狂言」が適しているのではないかと考えた。第４に、生徒たち自身が「狂言」の演者になることで、「狂言」の魅力や奥深さを知り、舞台発表を通して外国の方々と交流を図ることができると確信した。つまり、「英語狂言」を通して外国の方々とは通じ合えるものがあり、そこで得られるインパクトの大きさは未知数であると考えた。実際に、「能楽(能と狂言の総称)は、2001 年にユネスコの世界無形遺産に登録されて以来、世界の人々にその価値を認められ、積極的に受容される芸能の一つとなっている。

そこで、本研究では、室町時代から続く日本の伝統文化「狂言」(和泉流)の番組の中から１つの番組を選択し、生徒とともに「英語狂言」として創作・発表することで、その可能性と有効性を追究することを目的とした。

２．研究成果

1)　狂言「呼声」の選択

まず、私が師事している和泉流の「狂言」の中から、「呼声」という番組を選択した。その理由は、おそらく日本では中学生が「英語狂言」として上演したことのない番組であることと、登場人物３人の科白の量がほぼ同等で、平家節・小歌節・踊り節という独特の「節」と「舞」を伴った「抜参り物」の明るい番組だからである。「呼声」の見どころは、「居留守を使って家から出てこない太郎冠者を主人と次郎冠者があの手この手でおびき出そうとするが、太郎冠者は一向に家から出て来ない。そこで、太郎冠者を出て来させようと、主人と次郎冠者がいろいろな節の謡を謡っているうちに、どんどん盛り上がってきて、とうとう最後に太郎冠者が…!?」という展開である。

2)「呼声」の２種類の脚本作成

2020 年度は「呼声<５分間編>」の脚本作成とその舞台発表、2021 年度は「呼声<15 分間編>」の脚本作成と舞台発表を行った。翻訳する際に留意したことは次の３つである。①簡潔な文体(言葉遣い)を目指す。②言葉の響きや抑揚・間・リズムは可能な限り原曲に合わせて言語を置き換える。③狂言独自の言葉等、翻訳しなくても理解できそうな言葉(オノマトペ等)はそのまま使う。とくに難解だった箇所は、「平家節」と「小歌節」を原曲の謡に合わせて翻訳しなければならなったところと、「踊り節」を謡と舞のリズムに合わせて翻訳しなければならなかったところである。

＜「踊り節」古語＞	太郎冠者殿、留守でござる。 御用ござらば、仰せられい。仰せられい。
＜英訳＞	Taro-kaja dono is not staying in his house now. He is not hiding now.　I don’t know when he’ll be back here. Leave your message now.

また、「呼声」のオチにあたる「３人の登場人物が踊り節を謡い舞っている最後の場面で、太郎冠者が主人に呼ばれた時に、勢いに任せてうっかり自分の名前を『留守！』と言ってしまうところ」を“Gone!” と訳したところである。これは“I’m Gone!(私はいません)”と“I’m Gone! (私は「太郎冠者」ではなく「ゴン」です)”との掛詞になっている。

＜古語＞	主人：冠者！	太郎冠者：留守！　主人：冠者！　太郎冠者：留守！
	主人：	やい、己は太郎冠者ではないか！
	太郎冠者：	留守でござる！
＜英訳＞	主人：Kaja!	太郎冠者：Gone!　主人：Kaja!　太郎冠者：Gone!
	主人:	Hey, you are Taro-kaja, aren't you?
	太郎冠者：	I'm Gone!

3)「呼声」の所作とそれぞれの役について

私が師事している狂言師の野村万作先生からは「呼声」の番組の全体像と役を演じる上での心得を、高野和憲先生からは次郎冠者を演じる上での心得を、また、直接演技指導をしていただいた深田博治先生からは、役を演じる上での意識の持ち方や所作等をご教示いただいた。その結果、「呼声」を演じる上でのそれぞれの役に関する重要事項を以下のように確認できた。これらは、今後の指導にも積極的に活かしていきたい。

① 「呼声」の理想的な全体像

・「抜参り物」の狂言というのは、「太郎冠者が主人の許可を得ずに家を抜け出て伊勢神宮に参拝すること/どこかに行ってしまうこと」がテーマである。そのパターンの一つが「太郎冠者が出仕しない。どうやらどこかへ行ったらしい。今日は懲らしめのために太郎冠者の家にいって呼び出してみよう」という「呼声」である。ただ太郎冠者を呼び出すのでは面白くないので、「平家節(元来目が見えない人が平曲を謡うもの)」、「小歌節(細かい節により盛り上がる)」、そして「踊り節(扇を叩きリズムをとりながら『シャッキシャー』という足拍子が入り最後が賑やかになる)」が入る。それらを含め、「Kaja(冠者)」と「Gone(留守)」の掛け合い場面のリズミカルな舞は何度も回転するので目が回るところだが、単純だからこそ明るく楽しく演じてほしい。

・「呼声」は３人のコンビネーション・間・勢いが肝心なので、太郎冠者対主人・次郎冠者という構図をはっきりさせ、主人と次郎冠者はどのように太郎冠者を自分たちの勢いに乗せ、居留守を暴くのかということを意識した演技が必要である。

・「呼声」はテンポやリズムが重要であり、足拍子も踏まなければならないし、強弱もつける。演じている皆が楽しくなっていなければ見ている人も楽しめない。

・３人の最初の登場場面は、主人、次郎冠者、太郎冠者の順であるが、次郎冠者と太郎冠者は主人よりも少し細かく摺足をして、主人が縦板に入ったらテンポを上げて進むと良い。

① 主人役としての心得

・「抜参り物」なので、最初は主人の厳しく怒った調子から始まり、段々と楽しげになって、融和していくようにすると良い。

② 太郎冠者役としての心得

・機知に富んだ性格の太郎冠者と怒りに来た主人との関係性・性格の対比を考えながら演じることが肝心。

・主人や次郎冠者へのリアクションが大切で、最終的には我を忘れて舞うようにすると良い。

③ 次郎冠者としての心得

・主人が「太郎冠者を叱りに行こう」と言うと、「こういうふうにしましょう」と主人に提案するのが次郎冠者である。立場的には主人の方が偉くて太郎冠者の方が先輩なのかもしれないが、その中でも自分を出しつつ主人と太郎冠者の間を取り持つ潤滑油である。舞で回転する際には絶えず中心にいるので、回転数に関しては決して間違えてはいけない。

・次郎冠者がいるからこそ、家来関係が面白くなり、「和」をもって楽しい雰囲気で終わっている感じとなるのを忘れないようにする。

4)外国の方からの感想と今後の展望

2021 年 12 月に、「呼声<15 分編>」を 20 名ほどの様々な外国の方にご鑑賞いただき、次のような感想もいただいた。

The master has a very strong and commanding voice.　You can tell that he's in charge. Taro-kaja and Jiro-kaja have good chemistry together.　They act well together.　Taro-kaja has a very clear and strong voice. Their English is very good!　Jiro-kaja's singing voice is very beautiful!　The master's signing voice is very strong and powerful.　The Odoribushi style song was very funny!　I want to watch it over and over again.　I can tell that all three of the actors had a lot of fun doing this play together!

全員の外国の方々を対象としたアンケート結果からも、「呼声」の内容が英語でも十分伝わったことが分かった。これまで２年間に渡り、12 名の生徒たちと２種類の「呼声」を創作してきたわけだが、それらの脚本と上記の留意事項を基に、今後も新たな生徒たちと新しい「呼声」を創作し、外国の方々に向けて上演・発信していきたいと思う。最後に、この研究にご協力いただいた、野村万作先生、高野和憲先生、深田博治先生、相原麻紀さん、Jenna Jahner さん、Sophia Lilith さんに心より御礼申し上げます。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 青柳有季
２．発表標題 中学生による「英語狂言」の有効性
３．学会等名 全国英語教育学会第46回長野研究大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 青柳有季
２．発表標題 中学生による「英語狂言」の有効性 ～5分間の「呼声」を通して～
３．学会等名 関東甲信越英語教育学会第44回オンライン研究大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名